

天眼鏡

「あと一步の後押し」を活用して未来を

「農林水産業みらい基金」なる助成システムをご存知だろうか。農協系統金融の全国機関である農林中央金庫から 200 億円の拠出を受けて基金の運営を行っている一般社団法人である。2014 年に設立されており、「農林水産業と食と地域の暮らしを支え」ていくことを目的に、①農林水産業の持続的発展を支える担い手、②農林水産業の収益力強化に向けた取組、③農林水産業を軸にした地域活性化に向けた取組、への支援をねらいとする。

14 年度から助成活動を開始しているが、17 年度は 79 件の申請に対して 9 件が助成対象として決定し、今後 3 年間で 676 百万円の助成が行われることになっている。他にもいくつかの助成団体があって、それぞれに助成措置が講じられているが、本基金による助成の最大の特徴は、個別経営体への支援にとどまらず、これをつうじて地域活性化をも支援していくことをねらいとしているところにある。そして支援対象を選定していくために事業運営委員会が設けられているが、ここでの審査のスタンスは「今一步の後押し」「内発的な熱意」「明確なビジョンに裏打ちされた事業の確からしさ」等に置かれている。あくまで個別経営体の自立性や主体性を尊重するとともに、事業能力を重視したうえで、一部、自力ではどうしても足りない部分について助成をするもので、その効果は個別経営体のみならず地域へもしっかりとした効果や貢献があることを見定めることにしている。

こうして選定されたものは、創意工夫にあふれたチャレンジングなプロジェクトばかりで、これからの事業運営のモデル的役割をも担う。17 年度、助成対象 9 件のうち 2 件は畜産関係でもあり、その概要を紹介しておきたい。

一つは沖縄県石垣市にある農業生産法人である有限会社伊盛牧場による草地再生プロジェクトである。当社は酪農と乳製品の加工販売を営むが、酪農のみなら

ず子牛の哺育や肉用牛肥育に欠かせない粗飼料の生産基盤となる草地を再生させることによって、粗飼料の島内自給を高めようとするものである。

島内の土壌は粘性が強く、草地更新が行われないと、土壌が固くなって水の浸透性が低下し、その結果、降雨の際は鉄砲水となってさとうきび畑に流れ込み、赤土の流出を引き起こして、珊瑚の死滅を招いている。島内の耕地面積の約 35%は草地面積が占めているが、このところ時間、労力、費用がかさむなどから、耕起、播種といった更新が行われていないのが実情である。このため従来の草地圃場全面の耕起ではなく、県や市と連携して実証実験をすすめてきた、鋤を掛ける要領で根切りを行う心土破碎技術を用いて草地の更新をはかるようとするものである。

今一つが熊本県大津町にあるネットワーク大津株式会社による、水田や集落を守る大規模営農法人による自給飼料活用型 TMR 飼料供給プロジェクトである。当社は地元 12 の集落営農組織を広域ネットワーク化し、07 年に設立された県内最大級の集落営農法人である。289 名の構成員を有し、作付面積約 320ha を対象に、主食用米、大豆に加えて、近年では牛の TMR 飼料の原料となる飼料用米、飼料用イネの生産に注力している。

これにより持続可能な水田の維持と畜産自給飼料基盤の構築を図っていくこととしている。

実は、筆者は当基金の監事を務めており、いささか手前味噌になるが、本誌読者にも当基金の助成を受けることができるようプロジェクトをどんどん立ち上げてほしい。本助成は農林水産業の未来を切り開いていくにふさわしい経営体へと誘導していただくのパワーを秘めたシステムであると自負している。

(農的社会デザイン研究所・代表 蔦谷栄一)